原田博文堂の事業失墜と再興の歩み

――北原九十郎、油谷達・原田悟朗兄弟のこと――

稲岡　勝

はじめに

博文堂（原田庄左衛門）の出版活動といえば多くの人は、東海散士『佳人之奇遇』、末広鉄腸『雪中梅』『二十三年未来記』などの政治小説をまず思いうかべるだろう。確かにこれはこれで誤りではないのだが、博文堂の全体像からすれば一面的で皮相な見方とも言える。かつて出版史が近代文学史の亜流であった時代の後遺症が今もなお根強く残っているかのようだ。あたかも金港堂の出版活動を伊藤整や岡野他家夫が『浮雲』『都の花』『文芸界』の版元としか捉えていなかったのと同然である。

小稿は長く忘れ去られた博文堂の実像を出来る限り確実な典拠をもとに復元する一つの試みである。明治十年代後半から二十年代初めにかけて華々しい出版活動を繰り広げた原田庄左衛門は、なぜか突然経営を誤って逼塞を余儀なくされる。この間の劇的な変転については既に原田庄左衛門の回想[1]や、大沼敏男[2]、小沢清[3]、原田悟朗[4]などに先行文献がある。また磯部敦はそれらを踏まえた上で東京都公文書館の原文書を新たに発掘して「明治二十年代における博文堂原田庄左衛門」（『明治前期の本屋覚書き』金沢文圃閣　二〇一二年所収）をまとめた。これは不備も目につくが現在の到達点と言ってよく、ことに「博文堂書店創立御届」「同廃社御届」の新発見は博文堂研究に新たな展望をひらくものである。

中で特に問題なのは原田悟朗「木堂先生と博文堂」

（一）～（三）（『書論』一〇～一二号、一九七七年五月～一九七八年五月）である。一般に子孫が栄光ある自家の歴史を後世に遺そうとするのは人情であろう。ただその思いが過ぎると得てして荒唐無稽な物語になりがちで、博文堂をめぐる原田悟朗の支離滅裂な言説はその典型と言ってよいだろう。

一層悪いことには彼は美術史家のインタビューに応じて同工異曲の思い出話を語っている。佐々木剛三「清朝秘宝の日本流転」（『芸術新潮』一九六五年九月）、鶴田武良「原田悟朗氏聞書　大正―昭和初期における中国画コレクションの成立」（『中国明清名画展』日中友好会館一九九二年）であるが、大橋父子の博文館が分家筋にあたるとか噴飯物の出放題には事欠かない。美術史家に多少とも出版史の知識があればその虚実は容易に見抜けた筈なのに、真に受けて結果として歪曲をさらに助長した。その記述をまた無批判に孫引きする手合いが一向に後を絶たず、今日では博文堂の虚像は拡散する一方である。

原田博文堂復元の方法

では博文堂の全体像はどのように構築したらよいのだろうか。（一）博文堂の出版物そのものを数多く観察し比較分析する。見返、扉、奥付、証紙、序跋、前・後付の出版広告、売捌所一覧等々。これらはよく博文堂の実相を語っている。（二）東京書籍商組合の記録。中でも同組合の『書籍総目録』には発行所別目録が備わり、個別版元の取り扱い書籍が把握できる。博文堂について言えば第一版（明治二六年七月）、第二版（明治三一年五月）、長い空白を経て第八版（昭和八年九月）に出版物の掲載がある。また組合機関誌『図書月報』では入退会をはじめ移転廃業など個別組合員の動向がつかめる。原田庄左衛門は創立当初に組合役員を務めたことが幸いして明治三四年五月廃業と思わぬ情報を得た。（三）公文書。東京都公文書館所蔵『願伺届録明治二二年　会社規則』などから、博文堂書店創立御届（附：定款）および博文堂書店廃社御届の新史料が発掘できた。（四）新聞記事、新聞広告。原田庄左衛門の回想記（大朝、東朝）、博文堂書店・北原九十郎の特別広告（東日）、また新聞の出版広告からは新刊書目、再版・増刷など特定出版物の発行状況、また社屋の移転など経営に関連する情報が得られた。（五）『経世評論』などの雑誌記事・広告からは、関係の深い人物の経歴動向などが掴めた。（六）博文堂に縁のある人

々の日記・書簡、伝記等。犬養毅、内藤湖南、長尾雨山などの書簡集、依田学海『学海日録』、池辺三山「浪華日記」など。伝記では『北原九十郎君伝』『犬養木堂伝』『碩園先生追悼録』などあるが、原田博文堂への言及は何故か余りない。（七）市町村史類。『本荘市史』『東京市史稿』等。『小川一真関係資料目録』（行田市郷土博物館）を見ると、実弟小川一真の研究は隆盛なのに反して原田博文堂の扱いは黙殺に近い。それだけ出版史の研究は難しいということか。（八）人名録。『京浜実業家名鑑』に、絣の着物に学生帽の二男油谷達の経歴が載っている。

一章　原田庄左衛門は二度死ぬ
――忘れられた出版人の復活

（一）東京書籍商組合創立二十五周年紀念会

大正元年十一月十六日東京書籍商組合は創立二十五周年紀念会を挙行した。創立当初（明治二十年同月同日）は東京書籍出版営業者組合と称し、一三一書肆よりなる微々たる小団体にすぎなかった。それから四半世紀、日本の興隆と歩を一にして出版業は大いに発展をとげ、同業組合もまた基礎を強固にして拡大し紀念会の日を迎えるに至った。

式典ではまず現役の役員・委員たちが表彰され、次いでこれまで協議員評議員として組合に尽力した六十数名に記念品と彰考状が贈られた。注目すべきは物故したもと組合委員、協議員、評議員へも「特ニ青銅香炉一具ヲ霊前ニ贈リ以テ其功ヲ追賞」したことである。追賞状は和田篤太郎、大橋省吾、長尾景弼、辻敬之、江草斧太郎、杉山辰之助など今も名を遺す出版者二十五名に贈られた。その中には当然ながら原田庄左衛門の名も含まれた。

ところが次の七名へ贈られた記念品は居所不明で戻ってきた。旧哲学書院（井上円成）、旧上田屋（田平義三郎）、旧中近堂（中島精一）、旧敬業社（故井上蘇吉家族）、旧博文堂（故原田庄左衛門家族）、旧博聞社（故長尾景弼家族）、旧島屋（故塩島一介家族）。何れも組合創業時には盛業を極めていた出版者たちであるが、そののち廃業又は死亡等により業界とも縁が切れて組合事務所も遺族の消息までは掴めなかったようだ。明治末には原田庄左衛門は完全に忘れ去られ、東京の書籍商組合から故人扱いされていたのである。組合機関誌の記録によると博文堂

原田庄左衛門は「明治二二，二三年評議員を二期務め、三四年五月廃業」（「本組合創立以来役員当選の氏名」『図書月報』第一巻四号）となっている。

（二）どっこい生きていた

原田庄左衛門の健在を突然報じたのは『東京朝日新聞』（大正十三年十一月二日）である。新聞記事には「『佳人之奇遇』追憶―書林原田庄左衛門翁が出版苦心の六十年」とする派手な見出しと端坐する原田翁の写真が添えられている。記事のリードは下手な文章ではあるが、驚きをよく伝えているので次に全文引用して見よう。ただし固有名詞の誤字は訂正した。

「故西村天囚居士の旧著「屑屋の籠」の大正重版が四十年振りで同じ書肆博文堂から出版された。右は居士が落魄当時執筆したもので博文堂では当時として破格な稿料（二十字詰十行一円）を払った。其れが縁となって博文堂主人原田庄左衛門氏と居士との交遊は続いた。原田老人は明治二年から書肆を開き、当時の所謂開化思想方面の書籍を発行し、又明治初年全国の読書界を風靡した東海散士の「佳人之奇遇」、末広鉄腸の「雪中梅」等の出版界にエポックを作った書籍も刊行した人で、その後人生行路の幾変遷を経て、今尚矍鑠斯業に従事してゐる。翁の出版界追憶は頗る興味が深い。」

このリードに続いて原田庄左衛門の追憶話になるのだが、長文すぎるので中見出しを紹介するに留めたい。なお本稿に引用が必要な場合はその都度（原田談話）として使用する。○版権困難―半年も許可されず、○解散始末―「納本済んだッ」、○渋柿さん―教科書大儲けの事、○印税三割―「佳人之奇遇」の広告、○天囚居士―落魄から御用掛まで。

原田庄左衛門の唐突な新聞紙面への登場には、じつは伏線があった。これより先大阪朝日新聞社は大正十三年七月二十九日に死去した西村天囚の追悼キャンペーンを始めている。天囚は明治二十三年以来同社に勤続すること三十年、名文家として健筆をふるい大きな貢献をしていた。大正八年退社後は京都帝国大学講師、宮内省御用掛を委嘱され、社会的な地位と名声は揺るぎないものであった。大朝はこの機会をとらえて元社員を顕彰すべく「西村天囚君を懐ぶ」の連載を始め、天囚に親炙した関係者の思い出話を順次掲載した。第二回は博文堂主人談

「書生時代」（『大阪朝日新聞』大正十三年八月一日）で、処女作『屑屋の籠』の原稿を高く買ったが意外にも良く売れたこと、自由奔放な貧乏書生の暮らしぶり、関西に来て『さゝ浪新聞』を経て大阪朝日に入社したこと、また母親への孝心が深く情誼にも厚く受けた恩は決して忘れないこと等々、追慕の数々を披露している。

原田庄左衛門は「大正十三年九月十六日天囚先生五十日祭の日屑屋の籠第四版印刷の成るを見て記す」とした跋文の中で、同書は若き天囚の社会風刺小説で博文堂から出すと、一躍その名を天下に轟かせた思い出の一書であり、未だ読んでいない人のために第三版（明治二六年四月刊）から三十二年振りに重刊して故天囚の恩義に報いたい、と述べた。第四版の奥付を見ると発行者は子息の原田悟朗、住所は京橋区八官町八番地で発兌元博文堂と同じである。この時博文堂はすでに東京支店を設置して再進出を果たしていた。東京書籍商組合『図書月報』の組合記事によると、大正一二年一月博文堂合資会社支店（神田一ツ橋通り一七、本店は大阪市西区靭上通二丁目八十番屋敷）、昭和三年三月博文堂東京支店（神田区通神保町六　野沢広）がそれぞれ組合に加入している。

二章　原田博文堂の出版活動
――創業から全盛時代まで

原田庄左衛門（一八五五～一九三八）は武州忍藩士の長男として出まれ、幼名は清太郎。弟には写真界の先覚小川一真（一八六〇～一九二九）がいる。彼は上京して写真術を学び富岡製糸場前で写場を開業したが、明治一五年渡米し苦学して最新の写真術を伝習した。この時習得した写真術はのちに写真製版への途を開き、また修学援助を斡旋した榊原鉄硯との交遊から慶應義塾人脈と親密になる道筋ができた。何れも原田博文堂の将来に大きな影響を与えることになる。末弟の徳三郎は小川写真製版所の技師、渡米して写真印刷術を学ぶ。のち京都の洋品商小林家の養子となり小林忠治郎（一八六九～一九五一）と改名、明治三八年京都に小林写真製版所を開く。彼もまた印刷技術面で原田博文堂の再興に大きな役割を果たす。

原田博文堂の出版活動を概観すると、発展の軌跡は所付けによく表れている。そこで活動の場によって武州忍

時代（明治二～一一年）、東京本郷元町時代（明治一一～一八年）、日本橋久松町時代（明治一八～二一年）、京橋三十間堀時代（明治二一年一一月～二二年一〇月）、京橋南鍋町を経て神田西小川町の逼塞時代（明治二二年一〇月～明治三四年五月、この項は五章で扱う）に分け、それぞれの時期に発行した出版物やその特色、関与した人物などについてみて行きたい。

なお「博文堂は明治二年に日本橋久松町で出版を創め、京橋、本郷、神田に支店を出して順調に発展しました。」（原田悟朗　〇明治二年博文堂誕生）は明らかな錯誤である。

（一）武州忍時代

創業期について原田庄左衛門は明治二年から書肆を開きと述べている。また「明治四年頃上京、書店の住込店員として神田上白壁町に寄留、後に帰郷して行田の山鳥小路に開業」[3]とあるが、何れも根拠は不明である。最も確実なのは『教林新報』創刊号（明治五年一〇月）の諸国売弘所に「忍山鳥小路　原田清太郎」とある（鈴木俊幸　『本屋名寄』）[5]ことだろう。同誌は共紙表紙本文八丁「諸社諸山ノ告諭又説教上ノ高論其ノ他江湖ノ雑話二至ル迄　教化ノ一端トナルベキコトヲ報ズ」宗教雑誌。原田庄左衛門はその父（梅逸と号す）と同じく仏教の篤信者であった由、その故か仏教書は博文堂出版物の一つの柱になる。

この時期目に付くのは同じ忍出身の伊藤卓三（一八五一～一八八一）の著作物。彼は「箕作麟祥塾に英語を学ぶ。松本万年の紹介で『東京日日新聞』日報社に入り、明治九年一二月編輯長代理となり、同一〇年二月二一日限り編輯長署名を止める」（『明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房　一九八五年）。『幼学必携』初集（序　明治辛巳之冬伊藤卓三誌）のほか、得意の英語を生かしてアメリカの児童書によりながらその大意を翻訳した『発蒙一端／理学問答』上中下篇各二冊（緒言　壬申仲夏屈軒主人誌）、『地理学早案内／四季用文章』（二五三三年第四月　卓三誌）などがある。また岡田伴治（東江楼主人）『画本窮理物語』初～三編（明治五年）は子供向け物理の絵解き。曲肱軒主人『開化のはなし』初編（明治五年　図1）。興味深いのはこれら書籍の巻末に載る売捌所一覧を見ていくと、博文堂の出店が増えていくこと。最初は中

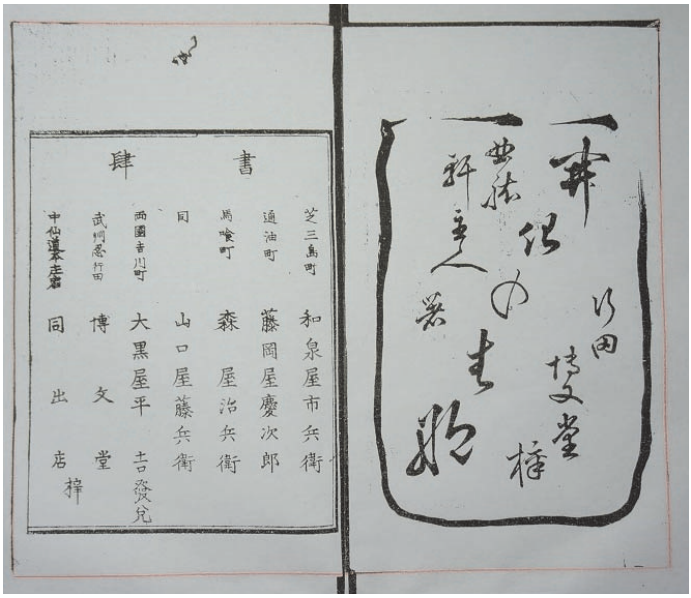


図１　曲肱軒主人『開化のはなし』初編（明治五年）の見返と奥付

山道本庄駅ついで「熊谷駅仲町・本庄駅新田町・秩父大宮元町・東京浅草西鳥越町（出張店）」と販路の拡大が顕著で、商売は順調にいったようだ。出店と出張店の違いはよく分からないが、浅草西鳥越に東京進出の足掛かりを得たのも注目される。中井弘『漫遊記程』三冊（明治一〇年一一月版権免許）の所付けには京橋区南鍋町とあるから、明治十一年には東京に移り商売を始めていたようだ。

（二）東京本郷元町時代

この時代は塚原靖（渋柿園　一八四八～一九一七）役割が大きく、その小学教科書が大当たりをとった。彼には回想記「兵馬倥偬の人」（『明治文学全集』八九　一九七六年）があって波乱万丈大変面白い。旧幕臣として幕末の動乱をくぐり抜け、幕府瓦解後は沼津兵学校や静岡医学校で学ぶ。地方の小学校教師を経て、明治七年『横浜毎日新聞』に入り翌年筆禍事件で禁獄一〇カ月、同一一年『東京日日新聞』に入社、以後職業として文筆に親しみ多数の作品を世におくった。塚原を原田博文堂に紹介したのは恐らく同僚の伊藤卓三であろう。また「之も

図２　塚原苔園『小学商業書』片野東四郎分版の奥付

図３　博文堂発兌教科書目

塚原さんのお蔭で、一時道楽のため私が埼玉の郷里へ帰った時塚原さんが奉還金額面千五百円を私の経歴、事情を知り乍ら進んで貸してくれ、それを資本に塚原さんの『唐宋八家手簡』を出した所、之が大受け、折柄『西郷言行録』も許可が降りて売り出す、続いて前申した教科書がどしどし販けて行って、忽ち再興しました。」（原田談話　〇渋柿さん）。この意味でも塚原渋柿園は恩人と言ってよかった。

渋柿園が父塚原苔園の名で出した『小学農業書』（明治一二年一二月初版、同一四年一〇月再版、同一七年一〇月校刻四版）、『小学商業書』（明治一三年四月版権免許、同一四年一二月再版、同一五年一〇月四版・名古屋片野東四郎分版　図２）は諸県に採用されて短期間に版を重ねた。しかも改版のたびに今日のアンチョコに相当する『小学農業書字引』『小学商業書字引』（山野重徳編輯）も出版しているから二重に大儲けしたはずである。

このほかにも教科書は裁縫、博物など数科目について発行済又は出版を予定（「博文堂発兌教科書目」　図３）している。また原田庄左衛門は成田山信徒向けに傍訓を付けた折本『聖無動尊秘密陀羅尼経』（明治一五年三月）、

『日用調法／早見三世相年代記』（明治一六年二月）、『聖不動経並般若心経』（明治一七年六月）を出版した。実用書には山野重徳『通俗／国会請願問答録』（明治一三年一一月）、同『徴兵令俗解』（明治一七年一月）がある。恐らく山野はその所付け（本郷区弓町一丁目二五）からいって、原田庄左衛門の姉婿山野常蔵と同一人物かと思われる。

明治十七年実弟の小川一真が米国で写真術を習得して帰国、彼は原田博文堂に望外の幸運をもたらした。それは在米中に知己となった榊原鉄硯が慶應義塾の同窓を中心とした広い人脈を原田庄左衛門に引き合わせたからである。彼らは新時代の著者となって博文堂の出版物に従来にはない色を添えることになった。榊原鉄硯『欧米鉄道経済論』（明治一八年二月）、犬養毅、尾崎行雄、末広鉄腸、赤坂亀次郎そして東海散士（柴四朗）、英吉利法律学校の創立者増島六一郎などの著作物が博文堂の黄金時代を築くのである。

（三）日本橋久松町の全盛時代

①政治小説

「東海散士柴四朗さんの「佳人之奇遇」出版は私の弟の小川一真が米国で御世話になって一足先きに帰朝し、いい条件で出して上げやうとの事で、印税三割でお引受けしましたが、当時勢ひのいい時だったので、各新聞紙に一頁独り占めで、以下次号と云ふ二日つなぎの広告を掲げたものです。」（原田談話　〇印税三割―佳人の奇遇の広告）

東海散士や末広鉄腸の政治小説は博文堂の代名詞になるくらい広く知られている。柳田泉の古典的な政治小説研究以来近代文学研究家によって多くの追究がなされてきたが、近年では決定版と言えるものが出てきた。東海散士『佳人之奇遇』は大沼敏男・中丸宣明『政治小説集二（『新日本古典文学大系　明治編』一七　岩波書店　二〇〇六年）、末広鉄腸『雪中梅』は小林智賀平校訂の岩波文庫版（改訂版三刷　一九九二年）や『政治小説集』一（『新日本古典文学大系　明治編』一六　岩波書店　二〇〇二年）があり、また末広鉄腸『二十三年未来記』には谷川恵一「翻刻の領野―末広鉄腸『二十三年未来記』」（国文学研究資料館編『明治の出版文化』臨川書店　二〇〇二年所収）があって、翻刻本諸版の詳細な比較研究は圧巻である。

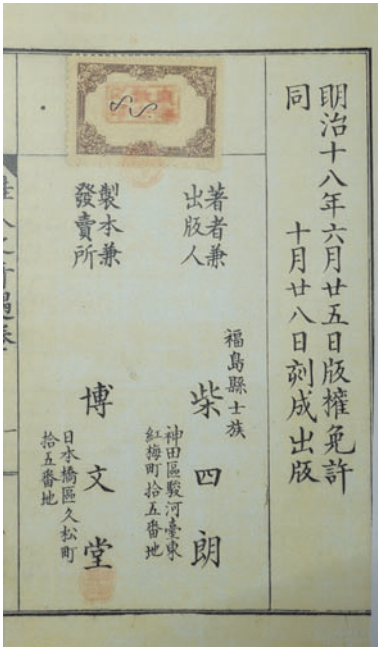


図４『佳人之奇遇』奥付、東海散士の証紙

従ってここでは政治小説の中身や意義については触れないで、主に出版史的に見て気になる点を指摘するに留めたい。一つは「印税三割」かどうかは別にして、東海散士に印税の支払いがあったのかどうか。少なくとも奥付を見る限り図４のような証紙の貼付と消印があり、一種の検印紙（印税支払いの証明）と見なすこともできる。第五編（巻九・巻一〇　明治二四年一一月～一二月）では楕円形えんじ色の証紙にかわるが、製本発売の権利が敬業社、牧野善兵衛に移ったことを示すものかもしれない。末広鉄腸『雪中梅』初版にも証紙「鉄腸著書證」の貼付があり、同じく印税支払いの可能性が考えられる。

博文堂は経営が傾くとこれら政治小説の発行の権利を手放したようで、末広鉄腸『雪中梅』は大阪の青木嵩山堂、東海散士『佳人之奇遇』は上記の本屋から更に第六編（巻一一・巻一二）～第八編（巻一五・巻一六）（明治三〇年七月～一〇月）では青木嵩山堂、北隆館福田に移っている。

②開化思想の書籍

「それから続いて国会請願運動が起ったのですが私の店では所謂国士とか壮士とか云ふ開化思想の書籍を出すので随分厳しい検閲をやられました。」（原田談話　〇解散始末）

国会請願運動とは明治二十年秋の三大事件建白運動のことと思われるが、連日大演説会が開かれ、各地から壮士が建白書を持って上京するなど熱い政治の季節になっていた。民権運動の最大の武器は、新聞と演説による言論活動である。原田庄左衛門は立憲政体の早期実現運動に共鳴し、犬養毅、尾崎行雄、末広鉄腸など政治運動家たちの演説筆記や、新聞論説集の出版を進んで引き受け、また彼らへの運動資金も惜しみなく贈り続けた。

遠藤愛蔵『明治二十三年国会之準備』（明治一九年七月、

同年一〇月三版）、鈴木省吾『朝鮮名士金氏言行録』（明治一九年一一月）、津田儀三郎『伏見義民録』（明治二〇年一月）、末広鉄腸『現今の政事社会』（明治二〇年一〇月、同年一一月四版）、同続編（明治二〇年一二月、朝野紙上の論文抄録）、尾崎行雄『少年論』（明治二〇年一一月、同二一年一一月四版）、同『志士処世論』（明治二〇年一二月）、小篠清根『処世哲学　一名紳士の綱渡り』（明治二〇年一二月、良明堂と相版）、鈴木天眼『護国之鉄壁』（明治二〇年八月、博文堂後藤綱吉と相版）、野田藤吉郎訳『五日紀変英雄之肝胆』（明治二〇年四月、文海堂松村九兵衛と相版）など。

③赤坂亀次郎と集成社

赤坂亀次郎（一八五八～一九四二）は福島出身、明治十一年慶應義塾卒。丸善支配人を経て小野梓没後の東洋館経営を引き継ぎ、一九年神田小川町に集成社を創業。『三酔人経綸問答』など中江兆民の著作が有名であるが、尾崎行雄、犬養毅など政治運動家の著作も多数出版した。犬養毅『政海之灯台』（明治二〇年一一月）は伊藤博文が感歎し大部数買い上げて地方官に読ませたという。興味深いのは原田博文堂と集成社との関係が密で、相版や版権譲渡のケースが少なからずあることである。

相版のものは尾崎行雄『新日本』初巻（明治一九年一二月、再版同二〇年二月、三版同二一年一一月）、同二巻（明治二〇年三月）、同『退去日録』（明治二一年四月、再版同二三年六月）など。版権譲受では犬養毅訳述『圭氏経済学』巻三（明治一九年二月版権譲受　同年七月出版）、同巻四（明治一九年二月版権譲受　二一年三月出版）、町田忠治『財政学』（明治二二年九月　再版博文堂明治二五年四月）など。

全盛時代だけあって出版物も教育、法律、政治経済関係と多種多様である。ここで逐一取上げるのも煩雑すぎるので、『朝野新聞』及び『時事新報』の一頁全面広告（図5、6）によって推察してもらおう。朝野の方は書名の扱いにメリハリをつけて大小様々なのに対し、時事はどれも等価として並列に掲載しているのがおもしろい。この新聞一頁全面広告は兎屋の誇大広告以外にはあまり例がないから、博文堂全盛時代を象徴するものと云って良いであろう。

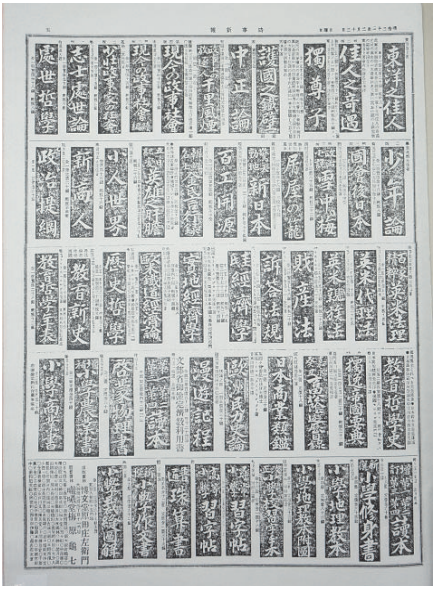


図６　博文堂の新聞全面広告
『時事新報』明治21年２月12日５面

図５　博文堂の新聞全面広告
『朝野新聞』明治21年１月22日５面

（四）京橋三十間堀時代

博文堂移転広告

「弊堂儀先般佳人之奇遇、雪中梅を始め政治法律経済教育等の諸書を発行仕候／處何れも非常の賛称を蒙り弊堂の面目不過之候就ては是迄の場所にては手狭に付来る三日　京橋区三十／間堀二丁目一番地　へ移転仕更に業務を拡張し諸名家／の著作に係る最良最美の諸書を出版発売可仕と存候則当日は辱くも　天長節の吉辰に／相当致候へば　聖寿の万歳と共に幾久しく御愛顧被成下度伏而奉祈願候敬白／明治二十一年十一月三日　博文堂　原田庄左衛門」（『郵便報知新聞』明治二一年一一月一一日四面　図７）

天長節の吉日を選んで行ったこの移転は、原田博文堂にとっては実に皮肉な結果となる。聖寿の万歳とは裏腹

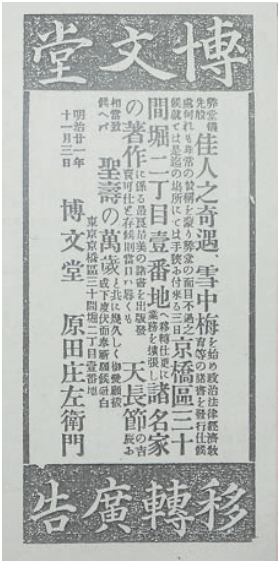


図７　博文堂の移転広告
『郵便報知新聞』明治21年
11月11日４面

に、博文堂の万歳は急激に怪しくなっていた。業務が盛大に赴き更に進んで規模を拡張しようとした矢先に、「料らすも意外の失敗に陥り」その打撃は店の根幹を揺るがすものであった。一体その事業失墜とは何だったのか。真相は第四章で詳論するが、その前に著名な政論雑誌『経世評論』に触れておきたい。

三章　『経世評論』の発行

（一）『経世評論』発行のいきさつ

この政論雑誌は通説では、原田博文堂が時代の寵児となった東海散士の名声を当て込んで発行したとされる。ただし当の散士は大阪毎日新聞の方が多忙で雑誌編集までは手が回らず、盟友の国友重章と協議して代りに池辺三山を主筆に充てることにした。三山は国友重章の父国友古照軒の塾生で重章と親しかったのである。幸いなことにこの間の事情は三山の「浪華日記」（明治二十一年）(6)が詳しく記録している。主としてこの日記によりながら『経世評論』発行の実情を見ていく。

まず雑誌発行の主体は原田博文堂ではなく「阪地の書肆某々等」である。明治二十一年二月ころ彼らはひと儲けを狙って時の人東海散士に雑誌編集を乞い、その印刷発行経費を共同で出資する計画を企てた。散士は書肆の意図を知って当初断ったが、義理のある原田庄左衛門の懇請を受けて渋々応諾した。しかし自ら編集する余力はないので国友重章の推挙にしたがい三山に白羽の矢を立てた。

池辺三山は「人ノ紙二人ノ筆ヲ握リテ恣ママニ己レガ持論ヲ吐ク」得難い機会と考えて承諾し十月初旬東京を立って大阪入りした。当地で発行兼印刷人となる堀捨次郎はじめ編集同人たちと会い、雑誌発行計画の細かい検討に入った。三山は当初から書肆との交渉は一切避けて、専ら論説の執筆および雑誌投稿を諸家に託する実務に徹することにしていた。

原稿依頼は既に東京で始めていて、三宅雪嶺、菅了法、志賀重昂、小中村義象などの諸家を歴訪し、また陸羯南、国友重章は投稿家の依頼周旋に多くの力を貸してくれた。そうした依頼先は政教社の同人の場合が多いが、中には文章家で鳴る依田学海もいた。

「義象、従父兄弟池辺吉太郎・柴四郎等が大阪にて行

ふ経世雑誌とやらんに、余文章をのせんことを請はれたりき」（『学海日録』明治二一年一〇月二〇日条）

「浪花の博文堂主人来りて、余に宮崎璋蔵が著の日本華文の序を請ふ。又半狂居士といふ少年をつれ来り、その著の群芳新譜の題言を請はれき。」（『学海日録』明治二二年一月二八日条）

「大坂の評論社池辺任道草稿を催促せらる。此任道は吉太郎の名なるべし。池辺吉十郎の子也」（『学海日録』明治二二年四月三〇日条）

池辺三山周辺の知友たちが原稿依頼に動いてくれたこと、また三山自身は投稿の依頼・督促など編集実務のみに専心した事などがわかる。注目すべきは学海のもとに「浪花の博文堂主人来りて」序や題言の執筆を依頼したことである。彼が原田庄左衛門でないことは明白であるが、いったい誰のことなのだろうか。もっとも可能性の高そうなのは大阪備後町の梅原亀七であろう。相版（共同出版）で書籍を出したり、博文堂出版物の関西大売捌所になるなど関係が深かった。なお半狂居士といふ少年とは西村天囚のこと、群芳新譜は新橋校書の品評である『新橋妓苑群芳新譜』（博文堂書店　明治二二年）である。学海の言う少年とは今日の青年に相当する意味だから注意したい。

（二）『経世評論』の構成と主な記事

創刊号（明治二一年一二月七日）から二〇号（明治二二年九月二〇日）までの原誌は、明治新聞雑誌文庫（一～一〇号）・国立国会図書館（一一～二〇号）に所蔵、ただし終刊未詳。これらを見た範囲で誌面の構成、主な記事内容、執筆者等について触れてみよう。

創刊号（図8）のデータでは、発行兼印刷人：堀捨次郎、編集人：岡本源四郎、発行書林は東京の博文堂原田庄左衛門本店と大阪今橋四丁目一三番地博文堂原田庄左衛門出張店。経世評論社の住所は大阪今橋の出張店と同じである。印刷所は大阪国文社だが同社の広告出稿が非常に多い。ことによると交換広告（雑誌印刷代と広告掲載料の相殺）かもしれない。

雑誌の構成は多少の出入りはあるが、〇経世評論、〇社友寄書、〇百花欄（名家たちの文芸作品）、〇説林、〇月旦集（批評欄）、〇投書、〇雑誌（雑報蘭）からなる。目玉は雑誌タイトルと同じ〇経世評論（時事論説）欄で

ある。池辺三山は精力的に論説を執筆したが、その主要な論調については池辺一郎『池辺三山』（改訂版中公文庫一九九四年）が「経世評論」の章を設けて詳細に紹介している。七号からは東海散士稿「帝国憲法疑解」を連載。〇百花欄では天囚の「小夜物語」、学海の「会津戦争の実話」「小柴重禍殉節の始末」などがある。山梨県の読者が「国民之友は淑女的、経世評論は丈夫的」（六号月旦集）と批評しているのも面白い。出足は好調で「非常ノ喝采ヲ博シ初版一万余部直二売切レ候」（二号社告）、また五号の社告では二、三号は厚くなりすぎて通常郵税一銭のところ倍の二銭となり、以後注意するとお詫びした。

図８『経世評論』創刊広告
『郵便報知新聞』明治21年12月７日４面

『経世評論』合本（一～一〇号）広告が第一七号に載ったりして雑誌刊行は一見順調に行っているようだが、本元の原田博文堂の経営には暗雲がたちこめていた。

第一九号（明治二二年九月六日）裏表紙の社告に「関東一手売捌ノ儀ハ予テ東京原田博文堂特約罷在候處今回都合二因リ右特約ヲ解除シ更二東京神田区錦町一丁目学齢館高橋省三方へ改約候二付最寄売捌所其他御愛読諸彦ハ同店ヨリ御購読アランコト希望仕候」

また外務省報告課編『通商報告』発行の請負契約解除を申し出（復刻『通商彙纂』解説）たり、小川一真が創刊した『写真新報』の大売捌に博文堂書店も名を連ねていたが、一一号（明治二二年一二月二六日）には「本新報儀是迄博文堂に於て売捌候處以後廃止候間此段広告候也」などと、雑誌の売捌きからも撤退する例が多くなった。博文堂の経営難はいよいよ深刻である。それを象徴するのが官報販売取次方の廃業（明治二三年八月）であろう。前年二月官報の普及拡大のために値下げと一部売りとが実施され、その年五月東京府下では原田博文堂、

博聞社、八尾新助、小柳津要人の四名が選ばれて販売取次業務を請負うことになった。しかし僅か一年後にはその一種の特権をみすみす手放す事態に追い込まれた。窮迫は一層ひどくなったのである。

四章　原田博文堂事業失墜の真相

「風の便りに、ちらと聞けば、博文堂何やら飛離れた競争から、飛離れた損を招き、当時逼塞との事やれやれ気の毒、どうかして、再び飛び出せかし、……」（『三版屑屋の籠』序　明治二十五年師走）

原田博文堂の事業失墜とは具体的には何だったのか。原田庄左衛門は口を閉ざして何も語らない。二男の油谷達は出版の理想を追いもとめる余り採算を度外視した上に、政治雑誌発行の失敗が大損を招いたとしている。しかし先に検証したように博文堂は『経世評論』の関東方面大売捌を担当しただけだから経営失敗の要因には当たらない。

（一）小学検定教科書の出版

「飛離れた競争から、飛離れた損を招」いた最もありそうな要因は、恐らく検定教科書の出版に新規参入したことと思われる。今更説くまでもないが明治十九年森有礼文部大臣は、小学校令を含む四つの学校令を公布して学校制度改革の基礎を固めた。小学教科書に関していえば「文部大臣ノ検定シタルモノニ限ルヘシ」（小学校令第十三条）と検定制が実施された。教科書は府県において採定される前に、文部省がその全てを検定・公示して杜撰な教科書を一掃し優良教科書を普及させるのが目的である。検定済教科書の採択方法については、地方長官（知事）が図書審査委員を任命しその合議によって決定することになった。

原田庄左衛門はこの制度改革による教科書出版の変質に気が付かなかったのではあるまいか。明治十年代確かに大儲けしたのは教科書で、塚原苕園『小学農業書』『小学商業書』などは版を重ね、「二十七県にも採用されました。『佳人の奇遇』『雪中梅』などは名を売りましたが、本当に売れて儲かったのは教科書でした」（原田談話　〇渋柿さん―教科書大儲けの事）

検定制度実施後にも原田博文堂は同じ夢を見ることができると踏んで新規参入したのであろう。文部省図書局

『検定済教科用図書表』（小学校用）（複製：芳文閣　一九八五年）を見ると、原田庄左衛門発行の小学教科書七種（読本、習字、算術、地理、理科、農業、商業）は明治二十一年上半期には全て検定を通過している。しかも幸運なことに東書文庫には原田博文堂の教科書全科目について、検定申請本と訂正再版本とが揃っていて比較検討が可能である。検定申請本に文部省図書審査官が眼を通し、疑問の箇所には付箋をつけて理由を開示し担当が押印する。例えば北条亮編『第一（～第四）読本』につけられた付箋には審査官須田・辻橋両名の押印がある。多くの場合は明白な誤字脱字、表記の誤り、事実誤認などの指摘箇所を修正して、訂正再版本として再度申請すると検定済となるようである。こうした手続きを経て、検定済教科用図書（図書名、巻冊、版次、発行年月日、検定年月日、定価、著作者、発行者）はようやく公示の運びとなるのである。

ただ検定済教科用図書はあくまでも文部省のお墨付きを得た事実にとどまり、このあと各府県の図書審査会で採択されなければ商品価値は生じない。この点が一般の図書と教科書のおおきな相違である。しかも長い実績と強固な地盤をもつ大手教科書肆（金港堂、集英堂、普及舎、文学社）という手ごわい競争相手が控えている。「飛離れた競争」とは恐らくこの意味で、難敵に互して教科書の採定を目指し戦ったのであろう。しかし原田博文堂の教科書は殆どの科目が採択されずに終わった。惨敗を喫した結果、「飛離れた損」だけが残ることになった。

（二）教科書の売込み競争

博文堂は売り方を間違ったのである。或いは過去の成功を過信する余り新制度を甘く見ていたと云うべきか。例えば『経世評論』創刊号のご祝儀広告。巻頭色ページに「小学教科図書及教育書広告」として三十三タイトルを列挙して、「已に諸府県に於て続々教科用書に御採用相成候」と宣伝している。果たして額面通りに受け取ってよいのだろうか。もし文言通りにいったのなら、「小学校教科書御改正の節は一応御検閲の上適当のもの御採用奉願上候也」の挨拶は必要ないだろう。教科書は一般図書とは異なり広告を打ってもそれ程の効果はない。新聞雑誌の広告は一般読者に働きかけることが本来だから、それが直ちに教科書の採用につながる効果は殆ど期待できないのである。

地道なやり方だが大手の教科書肆は教育社会に勢力を扶植することに努めていた。例えば教育界の有力団体に加入して、各府県の学事担当者や教職員などに顔を売り、教育諸家との結びつきを深める。金港堂の原亮三郎は大日本教育会などの全国組織は無論、各地に結成される地方教育会にも応分の献金をして着々と地歩を固めていた。こうした日常的な地味な活動が教科書売込み運動の際に生きてくるのである。もっとも教科書の採否が図書審査会の議決にある以上、手っ取り早く効き目のある手段は審査委員の買収で、これを競うことになるのは目に見えている。以後教科書検定をめぐる贈収賄の醜聞は絶えることがなく、文部省の弥縫的な制度改革も一向に効き目がなかった。

さらに露骨なやり方は政官界の関係要路に直接働きかけることで、しばしばスキャンダルにもなった。この時期もっとも有名なのは下田歌子著『国文小学読本』が、東京府の読本採定をめぐり生じた紛議であろう。簡単に言えば府知事高崎五六が教科書審査会の採定という適正手続を経ずに、下田読本の仮定（仮採用）を強行し、それが世論の猛反発を呼ぶと今度はあわてて仮定を取り消すというお粗末な東京府知事の失態事件である。事件の詳細を知りたい向きは基本文書を網羅した「教科用図書変更制限」（『東京市史稿　市街篇七二』五四七～五五三頁）を参照されるとよい。下田歌子は政官界の上層部に顔が広く、その立場を利用して三島通庸に自著『国のすがた』の採用方を懇願した手紙（「『国のすがた』につき下田歌子の書簡」『日本近代思想体系』第六巻所収　一九九〇年）が多数のこっている。「各府県教科書会議も弥来月中旬より始まり候よし故（中略）知事公と元田と承知なれば訳も有之まじく、此期を失ふ可らずと存じ、・・」（前掲書二二〇頁）と執念もあらわである。言うまでもなく教科書の採定にはこうした上からの影響力の行使も大きな手段となった。

「何でも当節ァ教科書が一等だが　扨この教科書と云ふ奴が　出版した上で文部省の検定済にもなり　何処かの県へでも採用せられりァ甘い物だが　折角出板しても文部省の検定で省かれりやァ何の役にも立ず　縦令ば検定済に成ッたとした処が　何処へも採用せられない時は外に使用処のない書籍だから丸で大損と為ッて仕舞ふし……」（骨皮道人『浮世写真百人百色』第六十三書肆、

総ルビ省略)。さすが当節の皮肉屋は物事の本質をよく見ている。原田博文堂は教科書検定制度の変質に無頓着なままに新規参入して、その揚句惨敗を喫したのである。恐らくこれが「料らすも意外の失敗に陥」ったことの最も納得のいく真実であろう。

「東都の書林に博文堂というものあり商売人のやうで商売人にあらず山師のやうで山師にあらず飛び離れた人に交り飛びはなれた著述をも買入れ飛び離れた損もすれば飛びはなれた得もするなにがなしに飛び離れた男一疋」(三板屑屋の籠の序)、天囚居士の原田庄左衛門評である。彼は小学検定教科書の出版という博奕にこれまでの儲け全てを賭けて、見事に掏ってしまったのである

教科書出版の特色は投下資本が巨額で、しかも資本回収の期間が長いことにある。莫大な借財を抱えた原田庄左衛門はその苦境をどのように切り開いて行くのか。次節ではそれを検討する。

五章　再興への苦闘

(一)　博文堂書店創立——株式会社による再建

明治二十二年二月七日原田庄左衛門ほか四人の発起人は「博文堂書店創立」の届を東京府京橋区長に提出した。原文書(東京都公文書館『願伺届録明治二二年　会社規則』)の翻刻は磯部論文[7]にあるので、ここでは同社定款の主要な箇条を抜粋し、同書店の性格を考えてみたい。

博文堂書店創立御届

一　今般私共発起人トナリ別冊定款の通博文／堂書店創立仕内外需用ノ書籍業相営度／候間書店創立ノ儀御聞届被成下度此段／奉願上候也

二十二年二月七日　　発起人

東京京橋区三十間堀二丁目一番地／書籍商　原田庄左衛門　印

秋田県由利郡本荘田町三九番地

当時京橋区三十間堀二丁目一番地寄留／金穀貸付商　北原九十郎　印

東京本郷区弓町一丁目二五番地／書籍商　山野常蔵　印

神奈川県足柄上郡怒田村二三番地／

当時京橋区三十間堀二丁目一番地寄留／農　伊東

直三　印

〔博文堂書店定款〕（全二十八条のうちから抜粋）

今般博文堂書店ヲ創立スル二付株主ノ衆議ヲ以テ決／定スル定款左ノ如シ

第一条　本店ノ名称ハ博文堂書店ト名ケ本店ヲ東京京橋区三十間堀二丁目一番地二設置ス

但シ事宜二因リ各要地ヘ支店及ビ出張店ヲ設クルコトアル可シ

第三条　本店ノ責任ハ有限責任二シテ負債弁償ノ義務ハ総テ株金二止マルモノトス

第四条　本店ノ営業目的ハ百般有益ノ書籍ヲ出版発売スルヲ以テ目的トナス

第五条　本店ノ業務ハ総テ社長二委任シ定款ノ正条二因リテ処理セシム

第六条　本店ノ資本金ハ三万円二シテ一株金百円トナシ総計三百株ト定ム

第十条　〔株券雛形〕（省略）

第十二条　本店ノ役員ト称スルモノハ左ノ如シ　社長／取締役／支配人／副支配人各一名

第十五条　左ノ権限ハ重役協議ノ上二非ザレバ定ムルコトヲ得ズ

一　支店出張店又ハ代理店ヲ設立シ又ハ廃止スルコト

一　新板書籍出版発売ノコト

一　営業上ノ貸借二関スルコト

一　地方二手代ヲ派出スルコト

第十九条　本店ノ損益精算ハ毎年二回（二月／八月）之ヲ整理シ全体ノ利益ヨリ一切ノ諸費ヲ引去リ其純益金ヲ左ノ如ク配当ス

十分ノ二　準備金／十分ノ一　社長以下店員賞与金／十分ノ七　株主配当金

右計算ヨリ生スル所ノ端数ハ後半期二繰越金トナス

第廿一条　本店ノ小集会ハ毎月十日午後六時ヨリ相開キ営業上ノ可否ヲ会議二問フ可シ

但シ株主半数以上出席スル二アラザレバ議事ヲ開クコト能ハズ

第廿四条　本店ノ営業時間ハ午前七時ヨリ午後六時マデトス

第廿五条　本店ノ休日ハ毎月一日十五日ノ両日トス

（以下省略）

まず発起人と原田庄左衛門の関係について。書籍商山野常蔵は姉婿で小川一真写真製版所重役の由。親類縁者として危急の援助に出たものか。博文堂の出版物に山野重徳名義のものが数点あるが、おそらく所付け（本郷区弓町一丁目二五番地）から見て山野常蔵と同一人物ではないかと思われる。

北原九十郎と伊東直三は磯部論文の指摘通り慶應義塾の同期入塾生で親しかったようだ。『経世評論』三号（明治二二年一月四日）に連名の年賀広告を出しているが、二人とも裕福な家の出と覚しく自由になる財力を期待されて参加したのかも知れない。二人はすでに共編『浄土宗紛擾記事』（明治二〇年六月）を博文堂から出版していた。

本店を東京京橋区三十間堀二丁目一番地に置き、資本金三万円の博文堂書店として新発足はしたが、目論見通りには株金は集まらなかったようだ。わずか十ケ月後には廃社御届を出す羽目になる。

「右者明治二十二年二月七日御届済之上書籍営／業致候處本月本日ヲ以テ廃社仕候間此段／御届申上候也　／明治二十二年十月十日」

株式による博文堂再建策は頓挫した。原田庄左衛門は本店を明け渡し京橋区鍋町に移転して従来の業務を続けるが、肝心の博文堂書店は誰が受け継ぐのか。テコ入れに登場するのが発起人の一人でもあった北原九十郎である。

（二）北原九十郎と博文堂書店

①北原九十郎の経歴

北原九十郎（一八六六～一九二二）は秋田県本荘町田町の名家に生まれ、郷土の公人として町政県政に関与する傍ら、鶴城と号する文筆家としても土地の新聞雑誌に健筆をふるった（『秋田人名大事典』第二版　二〇〇〇年）。

「明治十三年佐々木高行議官に文章を提出して選抜生となり十五歳の春笈を負ふて上京し佐々木伯の書生となって勉学することとなり後慶應義塾に学び明治二十年頃退いて博文堂出版業を譲り受け経世評論の刊行を経営し前後殆んど十年にして明治二十三年帰国した。」

（『北原九十郎君伝』小野純治編述　一九二六年序、宮城県図書館蔵）

伝記では肝心の博文堂時代の記述は数行に満たないの

で、『本荘市史』によって補記する。北原九十郎の生家は代々鋳物業で本荘藩に仕え、明治になると本荘の大地主の一人にかぞえられ自由民権運動にも挺身した土地の名望家（『本荘市史』通史Ⅲ　一九九七年）。その財力があればこそ二人の子弟を東京遊学に出し、更に慶應義塾に入学させることもできたのであろう。九十郎は明治十七年十月二日入社、弟の直二郎（明治四年九月生）は明治十九年十月一日入社（『慶應義塾入社帳』Ⅲ）である。直二郎はその後アメリカに渡ったらしく、『経世評論』創刊号に兄あてのアメリカ通信が載っている。のちには酒田で活躍、地方製材業界の先覚者として知られた。酒田木材専務、鳥海電力社長を務めた（『酒田人名辞書』）。

株式会社による博文堂の再建は肝心の資金が集まらず断念するほかなかった。発起人の中で善後策が協議された結果、北原九十郎が原田の代りを引き受けることになった。これにより、原田庄左衛門は京橋区三十間堀の店を明け渡し、同区南鍋町二丁目四番地に移転した。この時の移転広告によると「官報販売取次及ビ／通商報告発行致シ居候處今般営業ノ都合二依リ左ノ場所へ移転仕」（『東京日日新聞』明治二二年一〇月一三日一面特別広告図9）とあるから、雑誌の販売権は継続維持したようである。

②博文堂書店の譲渡

拙者義今般熟議之上博文堂書店ヲ原田庄左衛門ヨリ譲受ケ／従来発売之書籍ヲ一切引受ケ致候二付益々業務／二勉強仕候間何卒倍旧ノ御愛顧ヲ仰度此段江湖／諸君二謹告仕候也

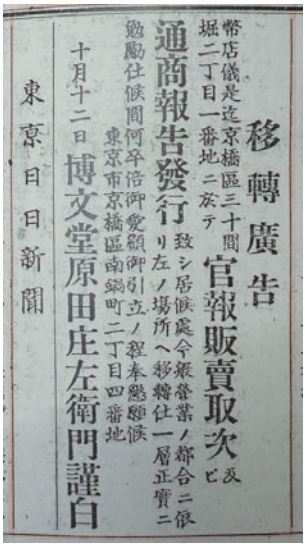
〇南鍋町二丁目博文堂原田庄左衛門トハ別店／二付区別ノ為メ店号ノ上二左ノ記号相附シ／候間併セテ広告仕候也

東京々橋区三十間堀二丁目一番地／Ⓚ博文堂書店北原九十郎

（『東京日日新聞』明治二二年一〇月一六日八面　図10）

北原九十郎はさらに念を入れて次の特別広告を打つ。特別広告とは最も人目を惹く新聞題号直下の広告で、当然料金も高い。

従来原田庄左衛門ヲ主任トシ京橋三十間堀二丁目二於／テ組合営業罷在候博文堂書店ハ都合有之今般拙者引受／候二付テハ一層業務勉強仕候間倍旧ノ御愛顧伏而奉希


移轉廣告

幣店儀是迄京橋區三十間堀二丁目一番地ニ於テ官報販賣取次及ビ致シ居候處今般營業ノ都合ニ依リ左ノ場所ヘ移轉仕一層正實ニ勉勵仕候間何卒倍御愛顧御引立ノ程奉願候

東京市京橋區南鍋町二丁目四番地

十月十二日 博文堂原田庄左衛門謹白

東京日日新聞

図 9 原田博文堂の移転広告
『東京日日新聞』明治22年
10月13日 1面

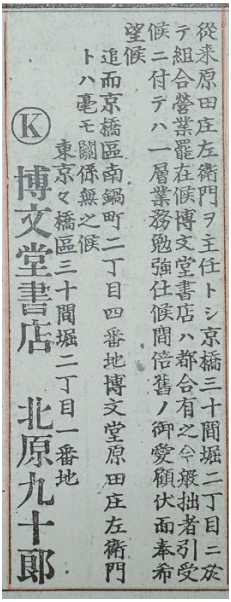
拙者義今般熟慮之上從來發賣之書籍ヲ一切引受ケ致候ニ付益々業務ニ勉强仕候間何卒倍著ノ御愛顧ヲ仰度此段江湖諸君ニ謹告仕候也

○南鍋町二丁目博文堂原田庄左衛門トハ別店ニ付區別ノ爲メ店號ノ上ニ左ノ記號相附シ候間併セテ廣告仕候也

東京々橋區三十間堀二丁目一番地

Ⓚ博文堂書店北原九十郎

図10 博文堂書店の譲受広告
『東京日日新聞』明治22年
10月16日 8面


從來原田庄左衛門ヲ主任トシ京橋三十間堀二丁目ニ於テ組合營業罷在候博文堂書店ハ都合有之今般拙者引受候ニ付テハ一層業務勉強仕候間倍舊ノ御愛顧伏而奉希望候

追而京橋區南鍋町二丁目四番地博文堂原田庄左衛門トハ毫モ關係無之候

東京々橋區三十間堀二丁目一番地

Ⓚ博文堂書店 北原九十郎

図11 博文堂書店の引受広告
『東京日日新聞』明治22年
10月26日 1面

＼望候

追而京橋区南鍋町二丁目四番地博文堂原田庄左衛門／

トハ毫モ関係無之候

東京々橋区三十間堀二丁目一番地／Ⓚ博文堂書店

北原九十郎

（『東京日日新聞』明治二二年一〇月二六日一面特別広告図１１）

組合営業とは耳慣れない業界用語である。原田庄左衛門個人経営の博文堂は破産に瀕し、それを救済するために共同経営の博文堂書店に改組したことの意味であろうか。主任の原田は事実上解任されて博文堂書店を去り、代わって北原九十郎が主任として経営に当たることになった。恐らく北原は郷里の財力をアテにされ慶應人脈の慫慂によって事業の継承を引き受けたようだ。しかし彼の活動は案外短命に終わったらしく、伝記によれば十年間の遊学を終えて明治二十三年には帰郷している。長男の故に家業の金穀貸付業を継ぐことになっていたのか。何やら道楽息子が出版に金を投じて、思うに任せないと見るや嫌気がさして故郷へ引き揚げたという気がしない

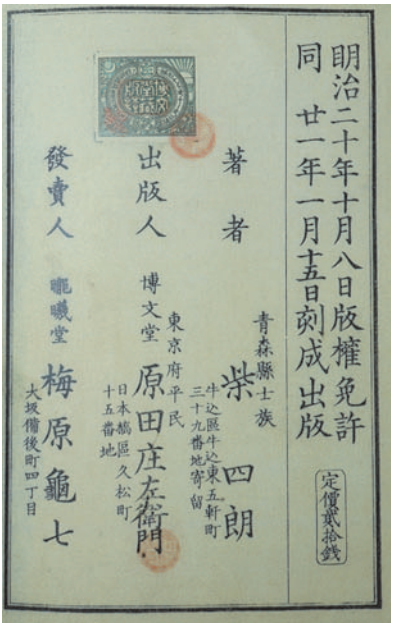


図12『東洋之佳人』初版奥付　博文堂の証紙

図13『東洋之佳人』再版奥付　博文堂書店の証紙

でもない。この辺の本当の事情は新史料が出ない限りは不明としておく外ない。

なお奥付に貼付された証紙は版権の所有関係を示すものであるが、従来見慣れた博文堂の証紙（図１２）はこの時期以降使われることは全くない。代わって薄紫色、緑色又は橙色の博文堂書店の証紙（図１３）が用いられることに注意したい。原田庄左衛門の個人商店時代は去り、組合（共同）経営に移行したことの象徴と言えそうだ。

この間の出版物では当然ながら発行人から原田庄左衛門の名が消え、又は脇役にまわる。釈宗演『西南之仏教』（明治二二年一月　伊東直三）、『新橋妓苑群芳新譜』（明治二二年二月　北原九十郎）、高橋達『英国叢談』（明治二二年六月　伊東直三・梅原忠蔵）、末広鉄腸『我国之内政外交』（明治二二年六月　北原九十郎・原田徳三郎、北原識語あり）、辻治之『日本経国正義』訂正再版（明治二二年七月　北原九十郎、一月初版は原田と相版）、中西牛郎『宗教革命論』訂正再版（明治二二年七月　北原九十郎・原田庄左衛門、初版は同年二月）、末広鉄腸『鴻雪録』（明治二二年七月、再版同年一一月春陽堂と相版、三版

同二三年二月）、荒井甲子三郎『提要理財学』（明治二二年八月　原田徳三郎）、植木枝盛『条約改正如何』（明治二二年九月　北原九十郎・梅原亀七）、島田三郎『条約改正論』（明治二二年一一月　原田庄左衛門、発兌人原田徳三郎）、などが目についた。

（三）原田博文堂、復活の曙光

一年有余の沈黙の後、原田庄左衛門は読者に対して再興の挨拶を敬白した。尾崎行雄『少年論』訂正六版（明治二四年九月二八日）巻末の「博文堂発兌書目」全一九丁の冒頭で以下のように述べる。既に磯部論文に全文の

弊店はさきに奇警斬新理義精明なる書籍を出版し一世の文学世界を震動し業務日に月に盛大に赴きしと雖て遂に恐る可き規模を擴張し愛顧の在賞に順慕する所あらんとせしに料らずも意外の失敗に陥り爾来其回復を計らんと欲し日夜諸賢に懇請する所あらんとせしに暫くも怠惰する時なく汲々として止まざるもの既に数月其の効験遂に貫徹する所あり債主諸家は義心を出し督促を緩めて事業を補成せられたるを以て益に大に勇進の機会を得益々規模を擴張し事業を回復して諸賢諸家の厚遇に報ふるのみならず更に大に学芸上の裨益を図らんとす願くは朝野の君子弊店が曾て博せし名誉を回顧し印書の精美校正の実を了察して今後の業務を推知せられんことを誠懇請の至りに堪へず恐々謹言

二白従来弊店開刊の書籍中品切れとなりたる分は今回更に再版に付し廉価を以て発売すへし是又購読の栄を賜はらんことを請ふ

明治二十四年九月　博文堂　原田庄左衛門　敬白

図14 原田博文堂の口上
（尾崎行雄『少年論』第６版の後付広告）

［版元口上］（図１４）

弊店はさきに「奇警斬新理義精明なる書籍を出版し」、世の中を驚かせ、業務も日々盛業に赴き更に規模を拡大して皆様の愛顧に応えようとした折、「料らすも意外の失敗に陥り」以来その回復を図ろうと日夜努力をおしまず、東奔西走して休む間もなくつとめ、ついに熱意が実って大家諸賢は同情して弊店の再興に力をかし、債主諸家は督促を緩めて事業を助けてくれた。ここに弊店を復興して名家が著述した諸種の書籍を開版し、「既に失墜せし事業を回復して諸賢諸家の厚遇に報ふるのみならず、更に大に学芸上の裨益を図らんとす。」

願くは弊店が曾て博した名声を思い起こし、印書の精美校正の実正を了察して、今後の業務を推知されて、益々のご愛顧を伏して懇請いたします。

「二白従来弊店開刊の書籍中品切れとなりたる分は、今回更に再版に付し、廉価を以て発売すへし。是又購読の栄を賜はらんことを請ふ。」

明治二十四年九月／博文堂　原田庄左衛門敬白

京橋南鍋町に立ち退いて以降、出版の空白期間がかなり続いた。おそらく莫大な借金の返済又は返済猶予の交

渉に追いまくられていたのであろう。家庭（貧乏暮らしをする妻子）を顧みるどころではなく、出版の余裕なども全くなかったに違いない。漸くある程度の見通しがついて、再興の口上を述べるまでになった。店舗も西小川町二ノ五に移し、手間とコストのかからない旧版書籍の再版から手掛けることにしたようだ。

原田圭吾訳述『内地干渉埃及惨状』（明治二三年一月）、尾崎行雄『信任投票の原理　国会解散の準備』（合本）五版（明治二四年九月一三日、合本再版同年八月二七日）、鈴木天眼『活青年』（明治二四年一二月、増補再版明治二六年五月）、同『国民の真精神』（明治二六年九月）、畠山健編『桂園遺芳』（明治二四年一二月、再版明治二五年四月）、大石正巳『富強策』（明治二四年一二月）、小篠清根『解散始末』（明治二五年一月）、小野梓『国憲汎論』訂正増補第五版（明治二五年五月）、小池民次『教授及訓練』（明治二五年六月、増訂四版明治二九年一〇月）。

また手持ちの資本が足らないせいか相版も目立って多くなる。鈴木天眼『独尊子』増訂三版（明治二五年一〇月　境田俊太郎と相版）、大阪の文陽堂金川善兵衛との相版では、鈴木天眼『活文字』（明治二六年一月）、同『立身問答』（明治二六年七月）、西村天囚『快男児』（明治二六年四月）、同『屑屋の籠』第三版（明治二六年四月）、中西牛郎閲『瑞派仏教学』（明治二六年五月）、同『教育宗教衝突断案』（明治二六年七月）、また哲学書院との相版では稲垣満次郎『東方策』第二編（明治二四年一二月）、同『西比利亜鉄道論』再版（明治二四年一二月　哲学書院、初版同年八月）の特約販売所、などがある。

明治二十七年に入るとめっきり新刊が減少する。目についた『三国英雄真像伝』（明治二七年七月）は麗々しいタイトルとは裏腹に、日支韓将軍の肖像写真を集めた芸のないもの。殆ど小川写真製版所の刊行物と云って良い。名家の著述を大々的に出版する筈だったが、まれに新刊の企画があっても資力の面から意の如くにはならず、原田博文堂は疲弊しきって気息奄々というのが現実であった。

（四）原田博文堂の廃業

出版社の消長を占うには、その出版書目を検討するのが簡便である。明治二十六年以降東京書籍商組合では数

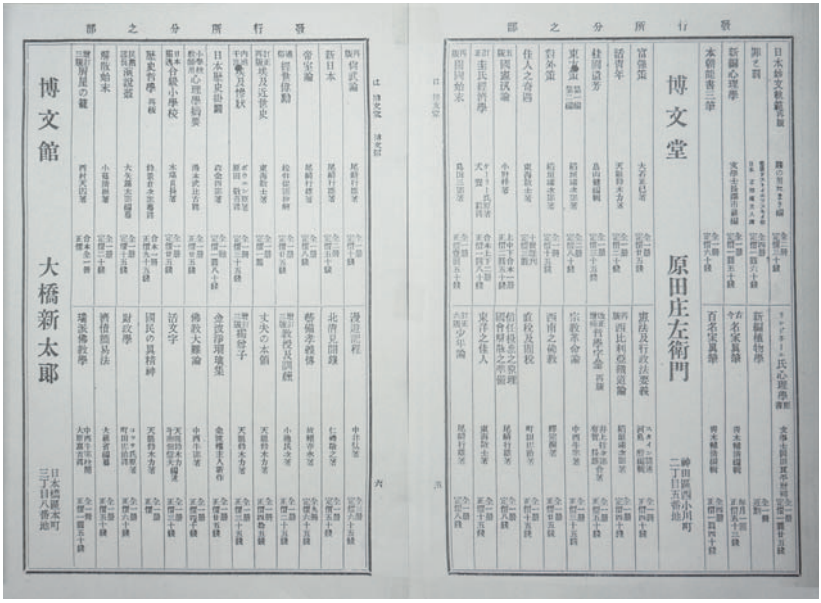


図15『東京書籍出版営業者組合員書籍総目録』［第１版］（明治26年７月）発行所分之部

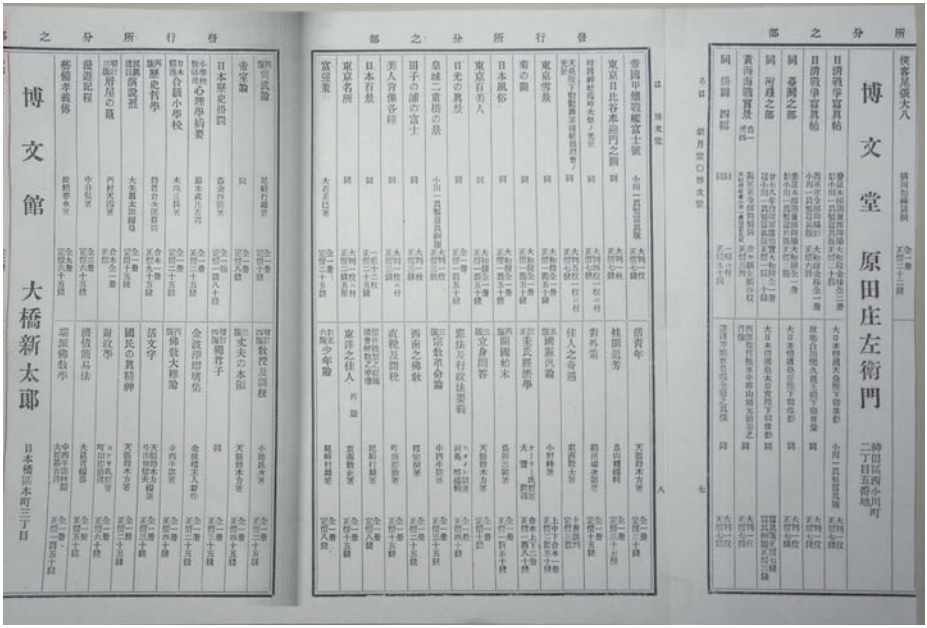


図16『東京書籍商組合員図書総目録』改正増補再版　［第２版］（明治31年５月）発行所分之部

年に一度の割で組合員の『書籍総目録』を編纂刊行している。この総目録は四部構成で、「発行所分之部」は各版元の在庫目録（一部扱い品を含む）になっている。これにより第一版（明治二六年七月）と第二版（明治三一年五月）の博文堂の書目（図１５、１６）を比較してみよう。

掲載の点数は第一版四四点、第二版では六二点。一見すると大幅に増加したようだが、小川一真の写真帖類が二六点も占めているので差し引くと実質は三六点と減っている。第一版から八点が除かれたことになるが、おもに他社の委託品、一過的な時事を扱った際物などである。一、二版の三六点の書籍は並べ方も含めてほぼ同一、ただ増補改訂されたものがあり次の六点である。中西牛郎『三版宗教革命論』、同『再版仏教大難論』、東海散士『再版東洋之佳人』、小池民次『増訂四版教授及訓練』、鈴木天眼『三版丈夫の本領』、同『増訂四版独尊子』。

以上の数字と書目の内容からこの期間（明治二十年代後半から三十年代初め）、原田博文堂の出版活動はほとんど停滞していたと推定できる。新刊書籍は皆無に近く、わずかに増補改訂版が六点にとどまった。内田魯庵が目撃した通り「神田の西小川町の屋敷長屋に逼塞して辛うじて出版を継続していた」（『銀座の本屋』）と見てよいだろう。或いは依然として借財の弁済に追われて東奔西走、出版には手が回らなかったのかもしれない。雑誌や他店書籍の委託販売も先に見たように止められて口銭の稼ぎようもない。

三十年代になっても復興の見込みは立たず、ついに明治三十四年五月書籍商組合に廃業届を出すに至る。その時までの出版物は管見では僅かに三点、南条文雄編『笠原遺文集』（明治三二年七月）、小栗栖香頂『晩年私言』（明治三二年八月）、鈴木天眼『増補三版丈夫の本領』（明治三三年三月）。前の二著作は仏教者の自費出版を請負ったもの、鈴木天眼のものは増補版に過ぎないから、新刊を出す資力も意欲もすでに失っていたようだ。

原田庄左衛門は奮闘努力の甲斐もなく力尽きて、東京での復活を断念し明治三十四年五月に廃業した。恐らくその直後から新たな約束の地を探し始めるが、大阪落ちを選ぶことになった。日露戦争のころと言われているがハッキリした時期はわからない。

六章　コロタイプ版製造家――大阪での復興

（一）博文堂大阪落ちの虚構

博文堂に関する原田悟朗の言説は時間と場所の記憶が曖昧で話に筋道がないから、真偽を掴めないもどかしさが残る。博文堂の大阪落ちについて彼は次のように述べている。

父原田庄左衛門は犬養毅、尾崎行雄等が主唱する憲法政治と国会開設の要求運動に共鳴し、彼らの著作発行を進んで引受け又全国遊説などの活動資金を負担した。このため博文堂は時の政府に睨まれて弾圧を蒙るばかりか、その手は庄左衛門の家庭にまで及び、幼い悟朗（明治二十六年生れ）は学校を六回も変わり、母と借家住まいの貧しい惨めな生活を余儀なくされた。「父は口約通りに確実に援助金を贈る為に母は最低の生活をしたのです。若手連中も最初の目的が実現したので、大阪落ちとなりました。（中略）両親は大阪落ちしてから苦労されて、美術出版だけに限定しました。原田博文堂を油谷博文堂にかえたので遂に弾圧もなくなった・・」（原田悟朗　〇政府の弾圧により博文堂大坂落ち）

例によって脈絡のない雲をつかむような話である。政治目的の達成がどうして大阪落ちにつながるのか。目的である憲法制定と国会開設は明治二十二、三年の事だから悟朗の生まれる前に既に実現している。それから十数年以上も弾圧が続いて大阪落ちになったとでも言うのだろうか。当時の官憲がいかに横暴としても非合法出版でもすれば格別、政治活動資金を用立てたくらいで本屋風情とその家族を長く執拗に弾圧することはまずあり得ない。悟朗の弾圧被害妄想は端的に言えば、ある苦い真実を秘匿するために作られた庄左衛門の虚構であろう。前述の通り博文堂の再興は失敗に帰し廃業に追い込まれた。東京を食い詰めて大阪落ちしたと云う本当のことは、貧乏暮らしに耐える子供の前では取り繕う外なくその方便に政府の弾圧を持ち出したのであろう。原田悟朗の言説には父庄左衛門からの聞きかじりに加えて、親炙した犬養毅の昔語りも混入している可能性がある。犬養が常に少数野党を率いて藩閥政府に挑み戦ったことは公然の事実で、その弾圧に抗した時の活躍話は折に触れて原田父子にもしたことだろう。それがいつしか悟朗には自分の

身の上に起きたことのように錯覚したのではなかろうか。悟朗の惨めな貧乏暮しの記憶は父庄左衛門の経営破綻の結果であって、政府の弾圧などによるものでないことは明白である。

（二）コロタイプ美術出版

原田庄左衛門は廃業後あらたな事業の天地に大阪を選んだ。なぜ大阪かと言えば、（い）博文堂出張店があった、（ろ）商売のパートナー梅原亀七、松村九兵衛や西村天囚などがいて支援を期待できる、（は）末弟小林忠治郎が京都に小林写真製版所を開業した、などを考慮したと思われる。時期は廃業直後ではなくて日露戦争頃と言われているが確証はない。原田庄左衛門の末弟が京都で製版所を開き事業を始めるのは明治三十八年である。

肝心なことは何を事業の柱にするのかである。従来通りの出版では東京での二の舞となり将来の見込みもなさそうだ。突破口になったのはここでも小川一真が米国で学んだ写真製版術、彼は原田博文堂の重要な節目に現れては救いの神になる不思議な存在である。

撮影した写真がそのまま印刷版面に使えれば簡便この上ない。小川一真が米国で習得したのはまさにその技術・写真製版である。写真製版とは、写真術を応用し印刷用の版を化学的な操作で製作する方法であるが、そのやり方には数種あって最も広く行われるものは阿膠版即ちコロタイプ版と、写真彫刻版即ち網目版である。網目版は新聞雑誌の口絵図版などの大量印刷に向いており、日清戦争の際には『日清戦争実記』（博文館）、『戦国写真画報』（春陽堂）などの戦時報道画報が多部数発行され、それが写真彫刻版の普及拡大の端緒になった。

一方コロタイプ印刷は工程が繁雑で大量印刷には向かないが、繊細な質感の表現に優れている。博文堂はこの途を選んだ。「大阪では美術出版に専念、小川一真が米国で会得したコロタイプ印刷により古社寺、国宝類の美術出版を行い、数年間は油谷博文堂として、父の大活躍となりました。」（原田悟朗　〇博文堂大阪落ちの後）

（三）油谷博文堂と油谷達

博文堂の新事業に大きな役割を演じたのは、実は二男油谷達（一八八六～一九六九）であった。既に西上実[8]の指摘があるが、コロタイプ美術出版事業を実質的に軌道に

乗せた功労者は油谷達である。それだからこそ原田ではなく油谷博文堂と名乗るのであって、弾圧逃れのために改称したとは原田悟朗の妄説である。堂号を変えたら弾圧が止んだと云うのも妙な話だが、そもそも廃業に瀕している出版者を弾圧して何になるのだろうか。政府弾圧による博文堂の大阪落ち伝説は原田悟朗の単なる思い込みであって真実には程遠い。先に見たように廃業に追い込まれた結果、東京には留まれず大阪落ちとなったのである。

油谷達は博文堂の新事業を立ち上げ成功に導くのだが、その陰には過去に写真製版術を応用した事業を手掛け成功した経験が大きな力を発揮したようだ。日露戦争頃に絵葉書ブームが起こると博進社の大橋光吉は日本葉書会を創立して（『大橋光吉翁伝』一九五八年）巧みに商機をつかむが、油谷達もこの機を逃さず美術絵葉書の製造販売に乗り出した。「叔父小川一真に頼らず、独力で家名再興のために絵葉書の発売を開始、好評を頗る得て常に数人の職工を使役し日々販売するもの多し。天性美術的思想に富み渡辺審也氏の門弟となりその奥義を極む。絵葉書製造をなすにあたり他店の出来ない良品を作り得るのはこのせいである云々」（『京浜実業家名鑑』京浜実業新報社　明治四〇年一二月、六〇二頁）。弱冠二十歳前後の油谷達は流行の絵葉書製造に写真製版を用いて成功して『名鑑』に載る名士となった。この時に蓄積した経験こそが博文堂の新事業に生きて、コロタイプ美術出版の花を咲かせたと見るべきであろう。こののち博文堂は法書名画をコロタイプで精印し続々と公刊することになるが、精巧な図版だけでなく装丁造本にも凝って帙入りの豪華本に仕上げて販売した。今日でも博文堂本は古書価が高く入手が難しいのはその意味では当然である。

国会図書館の蔵書検索で油谷博文堂を引くと四十九点（明治四十三年六月～大正四年）ヒットする。その後名前が消えるのは「昨大正四年甚だ薄資ながら敝社の組織を更め兄弟三名の合資会社となし・・」（『和漢法書名画出版目録』大正五年）と改組して博文堂合資会社になったからである。兄弟三名とは原田耕三、興家、悟朗でそれぞれ交互に代表社員を務めたようだ。油谷達は家業を離れて天性の美術センスを生かして洋画家に転身、関西在住の有力な官展系画家として名を馳せるようになる。

油谷博文堂、博文堂合資会社の出版活動については最

近、書道史や美術史専家による研究が著しく進んでいる。西上実「油谷達と博文堂―そのコロタイプ美術出版について」（『美術フォーラム２１』二十六巻　二〇一二年一一月）、同「上野理一の手紙―有竹斎中国書画コレクションの形成と特色」（『国華』一四〇四号　二〇一二年一〇月）、伊藤滋「博文堂影印碑法帖拓本考」（一）～（五）（『墨』二二七～二三一号　二〇一四年三・四月～一一・一二月）、菅野智明「博文堂における中国法書の影印出版について」（『中国近現代文化研究』一六　二〇一五年三月）、また小林写真製版所を開きコロタイプ印刷によって製作に協力した小林忠治郎については佐藤進「董康日記に見る小林忠治郎」（『二松　大学院紀要』第二三集　二松学舎大学院文学研究科　二〇〇九年三月）があり、彼もまた中国の文化人董康と親密な交友関係を持っていた。

（四）京都支那学の土台石

京都支那学について不案内な向きにまず高島俊男の明快な解説を紹介しておこう。

「支那学は、どこが漢学とちがうのか。宮崎市定氏は、「支配者の立場によって中国文化を導入利用するを目的とする因習的な旧学を黜け、むしろ中国文化を俎上に載せ、批判的立場を取って、客観的にその実体を究明しようとする」のが支那学だと言う。「因習的な旧学」が東京の漢学を指すことは言うまでもない。

吉川幸次郎先生は、「従来の日本漢学が、儒家の古典を専ら教条的な倫理道徳の書として扱って来た態度から脱却し、中国文明史の資料としてそれらを見、客観的な学問研究の対象とした」ものだと言う。きわめてわかりやすく言えば、中国の文化（特に典籍）を「ありがたやありがたや」とおしいただくのが漢学、これを単なる研究対象として「俎上に載せる」のが支那学、ということだ。」（高島俊男『本と中国と日本人と』ちくま文庫　二〇〇四年、四二六頁）

この新しい学問を起こし担当した人物は、京都文科大学の内藤湖南、狩野直喜、そして在野の長尾雨山であるが、三人は親友であった。「つまり三氏は、それぞれ過去の日本の漢学を、部分的には継承しつつも、さいしょからやり直したのである。そうして中国文明を、その本質的な面において、把握し、尊重し、祖述し、実践することによって、新しい学問の体系、美の体系を、日本に作

ったのである。」（長尾雨山『中国書画話』吉川幸次郎解説、三六六頁）

折から隣の清国は清末民初の大変動時代を迎えていた。ことに辛亥革命がおこると、革命の変を避けて日本に逃れ来る人々が後を絶たず、同時にまたおびただしい書画碑帖などの文物が流入した。原田父子は予て昵懇の内藤湖南や中国通で知られた犬養毅の紹介を受けて、中国関係の書画骨董を扱うようになった。のちには原田悟朗自身が北京・上海を十数回往復し、美術品を買い付けて持ち帰り販売するようにもなる。

荷物が入ると内藤湖南、長尾雨山時には羅振玉などに鑑定を依頼し、間違いのないものには彼等に題跋・題簽を書いてもらい、主として上野理一、阿部房次郎、藤井善助、黒川幸七など関西の有力財界人に買ってもらい、彼等の有名なコレクション形成の土台になった。湖南も雨山も書画の鑑識はもとより、漢文・書法何れも傑出した大家であった。この時期に流入した中国の書画・碑帖の名品には、この三人の手になる題跋・題簽が圧倒的に多いのは、以上の理由に因るものである（杉村邦彦『書学叢考』研文出版　二〇〇九年、四四二～四四三頁）。

油谷博文堂の新事業が緒に就いて間もない明治四十二年秋、京都では内藤湖南や狩野直喜を中心とする敦煌学がスタートを切った。将来品がない限り敦煌古書そのものは見られないから、実物に代わる写真（帖）がまず研究資料になり、また陳列物として一般に公開された（神田喜一郎『敦煌学五十年』筑摩書房　一九七〇年）。これ以降高度な写真撮影と精緻な影印出版は学術研究に不可欠の手段となり、博文堂も法書の影印出版を手掛けて結果的に大きな貢献をしていた。京都支那学の土台石と云う所以である。

案外見落とされているが、影印出版は（い）原件劣化以前の姿を留める、（ロ）秘匿せずに公刊して共有化する、ことにより文物の保存に寄与している。またこの時期の博文堂の活動を端的に言えば「辛亥革命を機に日本に流入した中国書画の優品を精緻なコロタイプ印刷で影印した先駆、かかる中国書画の購得を日本人士（特に関西の財界人）へ周旋・仲介する役割を担った」（菅野智明前掲論文）。

結び

原田博文堂の出版浮き沈み六十年を概観してきたが、ここで簡単に要約をしておこう。

明治二年武州忍に誕生した本屋は伊藤卓三などの著作にも恵まれて出店をふやし、早くも十一年頃には東京進出を果たした。本郷元町に落ち着くと、当時多くの本屋がそうであったように教科書の出版を手掛け、塚原渋柿園の農業・商業教科書が大当たりして商売の基礎を固めた。明治十七年米国から帰国した実弟小川一真は写真製版術と共に、新時代の著者となる人材を庄左衛門に紹介した。政治小説の東海散士、末広鉄腸、時局がらみでは犬養毅、尾崎行雄などの著者が輩出して出版物もヒットが続き博文堂は黄金時代を迎える。

日本橋久松町の店舗は手狭になり業務拡大のため明治二十一年十一月の佳節に京橋区三十間堀に移転。皮肉にもこれが暗転の始まりになった。「料らすも意外の失敗に陥り」博文堂の出版事業は失墜する。意外の失敗とは恐らく小学検定教科書の出版に新規参入した事であろう。教科書は文部省の検定が済んでも、各府県の審査会で採択されなければ商品価値は生じない。博文堂の検定済教科書七科目は殆どが採用からもれて、惨敗を喫する結果に終わった。残ったのは販売見込みのない過剰在庫と莫大な借財である。

原田庄左衛門はこの苦境をどのように乗り越えたのか。明治二十二年二月株式による再建を目指し博文堂書店を創立したが、あえなく十カ月で廃社。組合営業の博文堂書店から解任された庄左衛門は京橋区南鍋町に去る。代わって北原九十郎が主任として経営を引き受けたが、これも長続きはしなかったようだ。二十四年九月一年有余の沈黙の後、債主の了解を取り付け旧著者たちの後援を受けて庄左衛門は事業再開の口上を述べた。

しかし意気込みとは裏腹に資本不足は明らかで、専ら旧版書籍の再版や他書店との相版により活動を続けざるを得なかった。新刊には手が回らず業績は低落するばかり、博文堂の経営破綻は誰の目にも明らかとなる。明治三十年代に入り頽勢挽回の方途も見出せないまま、三十四年五月ついに廃業に踏み切った。

東京を追われて復興の新天地に選んだのが大阪である。新事業の柱はコロタイプ印刷による美術出版で、これは

実弟小川一真が米国から伝えた写真製版術の一つである。これより先庄左衛門の二男油谷達は写真製版を用いた絵葉書の製造販売に成功していた。原田博文堂の美術出版は若い油谷達の成功体験が道筋をつけたと思われる。当初は油谷博文堂と名乗るのもその故であろうし、彼は実質的な責任者として美術出版事業を軌道に乗せたのである。好都合にも明治三十八年から小林忠治郎（庄左衛門の末弟徳三郎）は京都に小林写真製版所を開業していた。コロタイプ版による美術書の多くは専ら彼の手で印刷された。

こうして見ると原田家一族の紐帯は固く、互いに支え合いながらいわば一種の同族経営によって新事業を成功させたと言える。大正四年博文堂合資会社が成立して油谷博文堂は消えることになるが、それは油谷達が家業を離れ、洋画家への道を踏み出したからである。彼は後に数々の傑作をものし、関西在住の有力な官展系洋画家として広く知られた。

おわりに志賀直哉との小エピソードを紹介して、この稿を閉じたい。

志賀直哉と原田兄弟

志賀直哉は東洋美術の書画に格別の愛着があった。古美術図録『座右宝』（大正一五年一一月）を自ら編集発行したほどであるが、精神を病んだ時にそれ等を見ると心が静まるのを覚えると述べている。その豪華図録には長尾雨山秘蔵の倪雲林「断橋臥柳図」があって特に気に入っていた。昭和十五年五月雨山に割愛の意向のあることを知り貰うことに決め、その仲介を博文堂原田悟朗に依頼した。翌月半ば待ちこがれた名品は「油谷君の弟の博文堂が持って来てくれた」（『志賀直哉全集』一九巻　五八～六一頁、若山為三宛書簡など）

内藤湖南や犬養毅の書簡を見ても、病気療養費に充当する或は政治活動資金の必要などから、その都度所蔵する書画の売却仲介を原田父子に依頼している。それだけお互いに信頼し合っていたのだろう。

【注】

(1) 原田庄左衛門の談話「西村天囚君を懐ぶ」第二回「書生時代」『大阪朝日新聞』（大正一三年八月一日）、「『佳人の奇遇』追憶」『東京朝日新聞（大正一三年一一月二日）

(2) 大沼敏男「原田博文堂について―明治期における一書肆

の考察」（国文学研究資料館共同研究「明治の出版文化」研究発表レジメ　二〇〇〇年九月二八日）
同「明治の出版社　博文堂」（『新日本古典文学大系明治編』第一八巻月報　岩波書店　二〇〇二年二月）
(3) 小沢清『写真界の先覚小川一真の生涯』（近代文芸社　一九九四年三月）
(4) 原田悟朗「木堂先生と博文堂」（一）～（三）（『書論』一〇～一二号、一九七七年五月～一九七八年五月）
(5) 鈴木俊幸『本屋名寄～明治二十年　近世日本における書籍・刷物の流通と享受についての研究』（科研費研究報告書　一九九九年三月）
(6) 池辺三山「浪華日記」（『池辺三山』（一）　日本近代文学館資料叢書一期文学者の日記（一）　博文館新社　二〇〇一年八月）
(7) 磯部敦「明治二十年代における博文堂原田庄左衛門」（『明治前期の本屋覚書き』金沢文圃閣　二〇一二年所収）
(8) 西上実「油谷達と博文堂―そのコロタイプ美術出版について」（『美術フォーラム21』二十六巻　二〇一二年一一月）

【附記】

博文堂の堂号は「博文約礼」に由来するせいか、これを堂号に使用する本屋は少なくない。原田博文堂の周辺でも、博文堂森市三郎（下総流山加村に本舗、東京湯島一丁目に支店、武州熊谷本町に支店［熊谷県御用書物売捌所］、群馬県前橋曲輪町に支店）、博文堂後藤綱吉（群馬県高崎田町）、博文堂藤原佐七（群馬県前橋曲輪町九番地、最初は博文堂森市三郎支店）が目につく。同じ堂号を持つこの三書肆と原田庄左衛門との間に何か関係があるのかについては史料が見当たらず目下は不明である。

なお、博文堂藤原佐七は現在仙台で盛業中の金港堂の創業者になる人物で、『出版文化人物事典』（日外アソシエーツ　二〇一三年）に立項しておいた。